

2025 年 9 月 20 日

研究休暇報告書

南山大学長

ロバート・キサラ 殿

所 属	外国語学部
職・氏名	教授 牛田 千鶴

受入研究機関等：基本的には国内（主に南山大学研究室および自宅）で研究に従事し、現地調査や研究発表等の目的でパラグアイ、アルゼンチン、米国等へも出張した。2025 年 7 月 30 日から 9 月 7 日までの期間については、ラテンアメリカ社会科学研究所（FLACSO）パラグアイ支部を受入研究機関として現地にて研究活動に従事した。

期間：2024 年 9 月 1 日～2025 年 8 月 31 日

目的：「多民族・複文化国家パラグアイにおける言語教育政策の進捗と課題」に関する研究の発展と深化

1. はじめに

学部での「演習」・「研究プロジェクト」（3～4 年生計約 30 名）、ならびに大学院での「研究指導」（前期・後期 計 4～5 名）を継続して担当しながらの研究休暇ではあったが、研究活動に集中できる時間を十分に確保することができたのは大変ありがたいことであった。研究休暇前半は主にインプットの、後半は主にアウトプットの期間と位置づけ、学会発表を通じて研究交流のための人的ネットワークを拡げるとともに、スペイン語での論文公刊により、パラグアイでお世話になった方々への研究成果の還元もできた。

また、研究休暇期間中に複数回の現地調査や国際学会での発表ができたのは、パッヘ I-A-1/I-A-2 や科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）《課題番号：25K15597》の採択、および大学からの渡航費支援等のおかげであった。以下は、具体的な研究活動とその成果の概要である。

2. 研究成果の概要

【現地調査】

1) 期間：2024 年 10 月 26 日～11 月 19 日

訪問先：メキシコ教育省先住民異文化間二言語教育局、オアハカ州先住民教育総局、パラグアイ教育科学省先住民学校教育総局、アスンシオン国立大学高等言語研究所、ラテンアメリカ社会科学研究所等

概要：メキシコ教育省先住民異文化間二言語教育局では、Vicente M. Cerqueda 局長にインタビューすることができ、10 月に発足したばかりの新政権下での今後の教育政策計画を含め、貴重な情報を得ることができた。オアハカ州先住民教育総局でも、局長の Nelson Vázquez 氏や文化遺産振興担当の Zeferino Mendoza 氏、先住民言語推進員の Angela Epitacio 氏らと面談し、先住民児童の多い学校の抱える様々な課題について確認できた。

パラグアイでも、教育科学省先住民学校教育総局において、局長の Rebeca Núñez 氏やカリキュラム担当の Alba Velázquez 氏、中等教育担当の Ivonne Gaona 氏らと面談し、重要な資料をいただいた。また、彼女らの同行の下、Maka 族や Mbya 族の居住区にある学校を訪問し、校長や保護者らから話を聞くこともできた。ラテンアメリカ社会科学研究所パラグアイ支部の Rodolfo Elías 教授からは、研究関連の助言をいただくとともに、2025 年 8 月の客員研究員としての受入れを快諾していただいた。アスンシオン国立大学高等言語研究所においても、所長の Valentina Canese 教授と面談し、研究交流について話をすることができ、大変貴重な機会となった。

2) 期間：2025 年 7 月 30 日～9 月 7 日

訪問先：サルタ・カトリック大学（学会開催地／アルゼンチン）、ラテンアメリカ社会科学研究所、パラグアイ教育科学省先住民学校教育総局、アスンシオン国立大学高等言語研究所、メキシコ国立先住民研究所等

概要：ラテンアメリカ社会科学研究所（FLACSO）パラグアイ支部を拠点としつつ、充実した研究活動を実現することができた。8 月 4～6 日には初めてチャコ地方にも出かけ、教育科学省先住民学校教育総局（DGEEI）基礎教育部長同伴のもと、Ayoreo 族、Enlhet Norte 族、Nivaclé 族の各共同体にある小中学校を訪問し、母語教育授業の参与観察ならびに校長・教員へのインタビューを行なった。また、DGEEI 局長や同局中等教育部長、アスンシオン国立大学高等言語研究所長、UNICEF 先住民教育担当者らと面談し、貴重な内部資料を得ることもできた。Fey Alegría（イエズス会系 NPO）の運営する学校や支援地域への訪問は、貧困地区の抱える教育の課題に関し理解を深める機会となった。アリゼンチンやウルグアイでも、FLACSO 各支部やいくつかの大学の教育関連研究所等を訪問し、貴重な交流を実現することができた。サルタ・カトリック大学で開催された学会（CELAO：アジア大洋州ラテンアメリカ研究協議会）でも、研究成果の発表を通じ、他国研究者らとの貴重な意見交換の機会を得た。メキシコでも国立先住民研究所を訪問し、母語教育に関する資料（教材等）を確認することができた。

【国際学会での発表】

1) 学会名：米国ラテンアメリカ学会（LASA: Latin American Studies Association）

期間・開催地：2025 年 5 月 23～26 日、米国サンフランシスコ市

発表テーマ：“La política lingüística y la educación escolar indígena en Paraguay, un país pluricultural y bilingüe”

概要：1992 年憲法で多文化・二言語国家を宣言し、スペイン語とグアラニー語を公用語に定めたパラグアイは、1994 年を「教育改革の年」と位置づけ、公用二言語によるバイリンガル教育を導入した。しかしその一方で、法令 5377 号（2021 年）は、パラグアイの先住民およびコミュニティが使用する様々な言語が認められなければならないと宣言している。本発表では、グアラニー語を母語としない先住民の子どものための教育プログラムに焦点を当て、複言語教育計画に基づく実施状況を概観し、今後の課題について考察した。会場では、米国はもとより、メキシコ、ニカラグア、コロンビア、ウルグアイ、パラグアイ、ブラジル等の研究者らから、貴重なコメントや質問をいただき、大いに励みとなった。

- 2) 学会名：アジア大洋州ラテンアメリカ研究協議会（CELAO: Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y de Oceanía/Latin American Studies Council of Asia and Oceania）

期間・開催地：2025 年 8 月 28～29 日、アルゼンチン共和国サルタ市（会場校：サルタ・カトリック大学）

発表テーマ：“La educación intercultural plurilingüe en Paraguay”

概要：パラグアイでは 2010 年に制定された言語法により、母語が国の公用語または先住民の言語のいずれかである場合、就学段階から母語で正規の教育を受ける権利が保障された（第 9 条、第 26 条）。他方、それに先立つ 2008 年に同国政府は、教育文化省（現教育科学省）内に先住民学校教育総局（DGEEI）を設立した。文化の尊重に基づく質の高い先住民学校教育を提供するため、DGEEI は異文化間複言語教育に焦点を当てた教育計画を策定し、教員研修プログラムを組織し、国際機関の協力のもと、先住民言語による教材を開発してきた。本発表では、多様な民族集団の自律的統合を実現するために必要な言語・文化政策、そして教育改革について、異文化間複言語教育に関する議論と実践に焦点を当てて分析を試みた。参加者からは、先住民教育へのカトリック教会の関与や教員養成のあり方等に関する質問が寄せられ、限られた時間内ではあったが興味深い意見交換の場となった。

【スペイン語による論文公刊】

本研究休暇の活動目標の一つに掲げていたのは、スペイン語による研究成果の公刊であった。その背景には、研究遂行過程でお世話になった現地の研究者や専門家、とりわけ当事者である先住民の人々に研究成果を還元し、少しでも恩返しに代えたいという思いがあった。拙稿をまとめるのに 2 カ月半という長い時間を要したが、パラグアイを代表する国立アスンシオン大学高等言語研究所の学術ジャーナルに投稿し、査読を経て掲載に至ったのは何よりであった。詳細は以下の通りである。

●Ushida, C., 2025, “Educación indígena y desafíos en torno a la interculturalidad en

Paraguay: una reflexión a partir de datos del IV Censo Nacional Indígena, *ÑEMITYRÁ - Revista Multilingüe de Lengua, Sociedad y Educación*, Vol. 7 Núm. 2, pp.237-257.
(<https://revistascientificas.una.py/index.php/nemityra>)

概要：パラグアイは、専門家や国内外の機関の協力を得て異文化間二言語／複言語教育を推進し、一定の成果を挙げてきた。しかしながら、2022年の第4回全国先住民国勢調査の結果からは、こうしたプログラムの継続性や大きな進展・成果は窺われない。本研究においては主に、公的機関や国際機関の公表するデータに基づく定量的アプローチを採用しつつ、2022～2024年に実施した3度の現地調査でのインタビューおよび収集資料を通じた定性的アプローチにより補完している。結論において本稿では、異文化間教育を成功に導くもう1つの重要な鍵は、パラグアイ社会の多数派を占める非先住民の子どもたちの教育にあると指摘する。そして、多民族国における質の高い教育プログラムに期待される成果として、高度な二言語／複言語話者であり、二文化／複文化に通じた専門性の高い先住民の育成が要になると主張している。

【講演】

日程：2025年6月21日

名称：立教大学ラテンアメリカ研究所公開講演会

会場：立教大学池袋キャンパス

演題：「パラグアイにおける言語政策と先住民教育—異文化間複言語教育をめぐる課題—」

概要：パラグアイは、旧宗主国言語であるスペイン語と土着言語であるグアラニー語を憲法で公用語と定め、それら二言語の併用にに基づく教育改革を展開してきた。周辺諸国の例のように、一部の住民（先住民・移民等）のみを対象とするのではなく、国民のバイリンガル化を目指し推進してきたところに特異性がある。しかしその一方で、現存する19の先住民族諸語の中でのグアラニー語の威信言語化という現象も生じている。「複文化・二言語国家」を憲法に謳うパラグアイを事例として、子どもたちの母語を重視する教育の展開に着目し、多様な民族の自律的統合を実現するには、いかなる言語文化政策や教育改革が求められるのかに関し、異文化間複言語教育の取り組みを中心に紹介した。対面・オンラインによるハイブリッド形式により、国内外から約130名の参加者を得て開催され、講演後の質疑応答も時間的制約がありながらも活発に展開された。

【和文論攷の執筆（2編）】

いずれも査読付き等ではない依頼論攷である。一つ目は『立教大学ラテンアメリカ研究所報』に収録予定のもので、上記講演内容を基にまとめた論攷（タイトル同じ）である。既に原稿（A4/15ページ）は2025年7月末に提出済みではあるが、校正等を経て最終的には今年度末に刊行予定とのことである。

二つ目は、『アルケイアー記録・情報・歴史—』第20号（2025年11月）に掲載予定

の論攷（15 ページ分）である。「スペインによる植民地化以後 500 年の歴史を超えて未来を紡ぐーパラグアイ国勢調査に見る先住民の言語と教育をめぐる課題ー」と題するもので、本報告書執筆段階においては初校確認を終えたところである。

【共著公刊（その他）】

研究休暇の課題とは関連性が薄い内容ではあるものの、研究休暇期間中のもうひとつの業績としてここに報告しておきたい。

- 『北米の小さな博物館〈4〉ー「知」の世界遺産ー』（担当：「記憶の継承と新たな歴史認識の共有をめざしてーラ・プラサ文化芸術センター《メキシコ系米国人博物館／グロリア・モリーナ料理館》ー」），彩流社，2025 年，pp.76-83.

3. おわりにー謝辞に代えてー

研究休暇中の 2 度にわたる国際学会での発表と長期にわたる現地調査の実施により、これまで以上に研究交流が深まり、他国の研究者らとの信頼関係もより強固なものとなった。米国ラテンアメリカ学会 (LASA) においては、教育研究部門のアドバイザーを仰せつかり、2026 年開催の年次大会（開催地：パリ）に向けたオンライン・ミーティングにも参加している。パラグアイの研究者らとの日常的交流も複数の通信媒体を活用して続いており、国立アスンシオン大学にて 11 月 18～20 日に開催予定のパラグアイ応用言語学会でも発表するよう依頼されている。こうした研究活動における成果を通じ、南山大学の発展や学生たちの教育に少しでも貢献できるよう、今後も努力を重ねていきたい。

最後に、このような貴重な機会をお与えくださったキサラ学長をはじめとする執行部および評議会構成員の皆さま、外国語学部長、スペイン・ラテンアメリカ学科長、外国語学部の先生方、そして学務の負担増をいとわず快く送り出してくれた学科の同僚たちに、この場をお借りし改めて感謝申し上げる次第である。

以上